

どの子も地域の学校へ！公立高校へ！東部地区懇談会

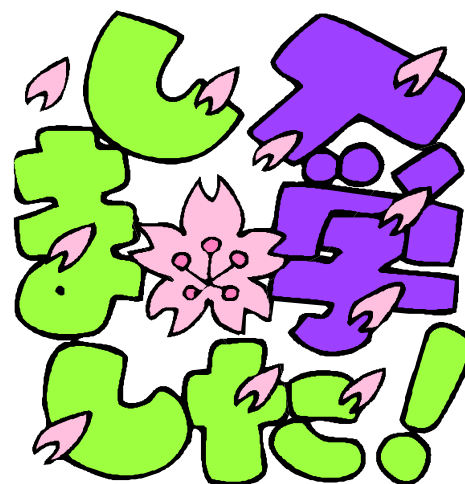
連絡先・春日部市大場690-3

Te l 048(737)1489

Fax 048(736)7192

メール : waraji@muf.biglobe.ne.jp

ホームページ <http://members.at.infoseek.co.jp/TOKOnews/>



いま春が来て 君は

毎年毎年、あってはならない定員内不合格で切り捨てられてきた齊藤晴彦君と山田葉子さんが、ようやく県立高校二次募集で、それぞれ大宮商業定時制、浦和一女定時制に合格しました。齊藤君は5年目、山田さんは3年目。小学校、中学校で近所の子も達と一緒に学び育ってきた、その関係を、社会への入り口である高校にもつなげたいという思いで受験してきましたが、毎年定員内不合格で切り捨てられ、齊藤君は間もなく20才になるうとしています。それぞれに背水の陣で県教育交渉に臨みました。

今年は、教育局として高校現場の理解を進めるため、障害のある生徒を受け入れた高校での研修や山田さんについては体験通学を行うなど、従来より一步踏み込んで努力を傾けました。

また、「障害による不利益がないようにするための受験上の配慮」に関する通知の中にあった、「介助を行う職員を配置できない」とする暗黙の排除を示す条項も、ようやく削除されました。

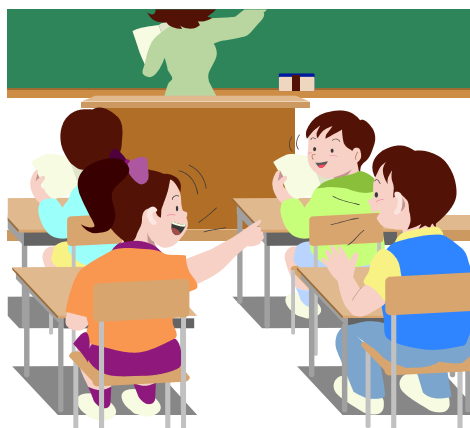
一次(後期試験)ではやはり定員内不合格で落とされ、教育局としてどう責任をとるのかと、発表当日、私たちは教育局に交渉を行いました。

長い回り道を経て合格の日を迎えた二組の親子とともに、16日、県にお礼の花束を届けました。今回の TOKO はこのうれしいニュースから。

TOKO NO.137 の内容 入学しました / 近所の学校に入るまで / 県教育局との話し合い(2005年3月4日 一次入試不合格の発表後) / 春日部市教育委員会と話し合いました / 誰でも参加できるイベント
情報 4月

(寄稿)

就学相談記録



近所の学校に入るまで

田代 真一 (蓮田市)

この TOKO をいつも紹介してくださっている「埼玉県ダウン症ネットワーク(SDN)」のホームページのスタッフで、「くれよんたうん」代表の田代真一さんが、お子さんのサトシ君の就学相談の記録を送ってくださいました。

「よりよい教育的環境を子どものために選ぶということも、親としてお考えになるべきではないでしょうか?」、「なににもわからないまま6年間過ごすのは苦痛ではないでしょうか?」、「サトシ君自身としては、楽しい学校に通いたいよ、と言うのではないのでしょうか?」などなど、洗脳を試みたあげく、意志が固いと見ると、「養護学校で教育を受けられるほうがよいのではとなりましたので、その旨お伝えいたします。」けっきょくは、学校教育法施行令22条の3に基づく一律の判定が初めからあり、それに一致させる(教育委員会の業界用語では「自己指導」)ための「相談」でしかないことが、よくわかります。

田代さん、ありがとうございました。つづきを楽しみにしています。

●第1回目 : 11月12日(金)午前9時~11時

市役所内にある相談会会場(3階)に向かう。受付には、市教育委員会職員のほか、子育て相談課職員、小学校教諭(普通学級・特殊学級)、養護学校教諭、元養護学校教諭などが待機。これらの面々は、就学相談委員会として組織されたもの。

氏名が確認されると、子どもと親が別々の部屋に通される。しかし、最初、状況が飲み込めないサトシは、私にぴったりくっついて離れない。そこで、「サトシ観察用」の部屋に一緒に入り、少し慣れるまでいる。幸い、ボール遊びで気持ちがほぐれたのか、すぐに打ち解けたので、悟士を残し別室に移る。

サトシの部屋には、担当職員が6~7名おり、遊ばせながら様子(協調性、順応性、知的状況など)を見たようだ。

別室には、小学校特殊学級の教諭2名と普通学級教諭の合わせて3名、そしてサトシの様子を見るために出入りを繰り返す市教育委員会学校教育課の方が同席した。

まず、最初に、あらかじめ記入した「就学・転学相談票」と、参考用としての母子手帳を提出。そして、出産時や成長過程、および障害の程度(合併症の有無、特別なケアが必要かどうかの有無)が問われる。

これに対しては、出産後に多血症と黄疸で緊急入院したこと。その入院時にダウン症であると告知されたこと。そして、幸い合併症はなく、肺炎で2回入院したものの、順調に育ってきたことなどを説明。身体的・病状的には問題がないことを強調する。

さて、発達状況の確認をした後、本論である就学先の話に入る。提出書類「就学・転学相談票」で、「普通(通常)学級でお願いします」と明記していたので、なぜ普通学級なのかの質疑応答が繰り返される。

曰く、
「保育園と違って、一定の時間枠での授業となるが、それに適応できるのか」、
「言葉による指示、指導が多くなるが、それについていけるのか」などなど。
これには、

「障害の有無に関わらず、どの子ども新しい環境に順応するには時間がかかるはず。確かにダウン症である悟士は、ほかの子より多少の時間はかかるかも知れないが、健常児と共にいる保育園でも何ら問題なく過ごしているのだから、順応してくれると思っている」。

「言葉は、まだまだ2語文がでない状況にはあるけれど、こちらが話す言葉にはそれなりに理解を示すことができるので、なんとかやっていけると思っている」などと答える。

また、「普通学級でやっていく時に心配な点は？」との問いに対しては、「まず、トイレの問題があるでしょう。家や保育園では洋式トイレでやっているが、小学校ではそれを利用することができるのでしょうか？（答え：1箇所しかない）もちろん、オシッコは立ってできるように訓練はしていくつもりで、いずれできるようにはなると思うが、当面、その問題が考えられます」。

「それ以外として、教師や同級生とのコミュニケーションの問題もあるでしょう。しかし、これも、時間と共に言葉は増えていくでしょうし、相手がそれなりに対応してくれるでしょうから、なんとかなると思っています」。「ただし、いじめや適応上のストレスで、登校拒否のような状況に陥った時は、特殊学級で熱心に教えられているベテランの熊谷先生にお願いする…ということもあり得ると考えています。それはその時々で適切に対応したいと思っています」と答えた。

「では、登下校の問題は？」

「体力的な側面、および交通事故に遭わないという観点から、本人が通学路を覚え、信号等に適応し、また、通学班の子どもたちについていけるようになるまでは、親の同伴ということも覚悟はしています。しかしこれも、時間の問題とと思っています」。

「なるほど、わかりました。しかし、今日、サトシ君の様子をうかがうと、とても積極的で、他者との関わりを能動的に求めようとしておりますよね。このよい状態をさらに伸ばしていくには、それなりの教育的環境が大事かと思うのですが…」

「おっしゃりたいことは、なぜ特殊学級に入れないか？ということですね。これに関しては、私は次のように考えています。サトシが成人したときに大事なものは何かなのですが、それは社会性の獲得です。もちろん、学校で習得する知識も大切ですが、それ以上に他者との関わり方を会得していくことが大事であると考えています。そのためには、普通学級でほかの子ともまれながら関係性を学んでいくこと。また、それによっていろいろな刺激がいただけるであろうと思っています」。

私は、以前、養護学校と特殊学級の見学をさせていただきましたが、とても丁寧に、また熱心に子どもたちに接しられ、教育的配慮に富んだ環境で教えていられることに感服させられました。しかしその一方で、こうも思ったのです。“守られすぎている”と。実社会では、障害者に配慮したような仕組みにはなっていない。むしろ、その逆で、就労状況はますます悪化の一途をたどっています。あえて言わせていただくならば、1979年の養護学校義務教育化以降、手厚い教育的環境が形成されたにもかかわらず、社会のほうはまったく変わっていません。結果、卒業後、社会に出る場がほとんど与えられない状況が続いています。

そうした中で、この子が成人していく過程で身につけておくべきことは、対人関係を円滑に結んでいくための社会性ではないか、と。それが実社会での生きる力になっていくはずだ、と思っています。そして、その力を育むためには、守られすぎている養護学校や特殊学級ではなく、普通学級でお願いしたい、ということです」。

「確かに、おっしゃる通りです。でも、サトシ君のことを考えると、いろいろな選択がある中で、はたして普通学級に進むことがよいことなのか、もう少しお考えいただきたいのです。というのも、普通学級では、大勢の子ども達の中でのひとりとしてしか扱われないことになるはずで、特殊教育を長年やってきた立場から言わせていただくと、折角、素晴らしい状態で育てられてきたのですから、学校においても、それをどんどん伸ばしてやりたい、私は思うのです。よりよい教育的環境を子どものために選ぶということも、親としてお考えになるべきではないでしょうか？」

「おっしゃる意味はわかります。私も、そう思います。そして、望むことならば、文部科学省がどのような内容を考えているかは存じませんが、個別支援教育プログラムというものが実施されるというのであれば、それを普通学級でやってほしいと思っています」。

しかし、現状では、それは望めないというのであれば、何を優先順位として選ぶのかとなるわけで、その場合、あえて極端に言うならばですが、特殊学級での素晴らしい教育的環境よりも、普通学級でほかの子と交わることでの社会性の獲得を選びたい、となるのです」。

「でも、サトシ君にとって、本当にそれでよいのでしょうか？ 極端な話、普通学級で学ぶ喜び、できたという達成感が得られるのは難しいのではないのでしょうか。サトシ君の学校生活を考えた場合、これはとても大切なことだと思うのですよ。なにもわからないまま6年間過ごすのは苦痛ではないのでしょうか？ それでもかまわないのですか？」

「多分、このお話は平行線になるとと思いますが、私としては、自分のことを振り返ってみても、勉強が学校の生活のすべてではないと思っています。友達とともに過ごすこと、これも学校における大事なことだと思っています。もちろん、丁寧に教えていただき、それによって学ぶ喜びを感じてもらえるのなら、それを望みたいと思います。ただし、それは普通学級においてです。

さきほど申し上げた特別支援教育ですが、これの実施に際しては、普通学級でのこともあり得るわけで、その場合、障害のある子だけでなく、教える側の教師の質も問われることになるわけですよ。（「耳の痛い話ですね」と言いながら笑う）私としては、それを望みたいと思います。

それから、普通学級に私がこだわる理由はもう一つ、健常児側の理解やサポートを得ることもあります。知的障害のあるサトシは、当然のことながら、何らかの援助・支援が無ければ生きてはいけません。さらに、この地域で生きていこうと思ったら、この地域の人たちに認知してもらふ必要も出てきます。ですから、仲間意識、友達意識をもってもらうためにも、普通学級に通うことが欠かせない、となるのです。ご理解いただけますか？」

「おっしゃることはわかります。私も、同感いたします。ただ、サトシ君の立場に立ったとき、本当にサトシ君はそれでよいと思うのでしょうか？ サトシ君自身としては、楽しい学校に通いたいよ、と言うのではないのでしょうか？」

「(皮肉をこめて)悟士の気持ちを代弁していただいて恐縮です。でも、普通学級でもまれながら社会性を獲得すること、そして、サトシを通して障害のある人との接し方を理解・学んでいただくこと。これが、長い目で見た場合、サトシのためでもあり、また、この地域、さらには日本の社会がいずれ変わっていくことの一助になるはずとっておりますので、ほかのどのことよりも優先事項とトップとなるのです。というわけで、いろいろとご苦労をおかけするとは思いますが、よろしく願いいたします(あくまでも低姿勢での応答に徹する)」。

以上、就学相談委員とのやりとりは、大体このようなものでした。

そのなかで、繰り返し問いかけられたのが、「なぜ、普通学級なのか？」、「なぜ、ほかの選択肢(特殊学級・養護学校)を選ばないのか？」、「本人のことを考えたなら、よりよい教育環境のところを選ぶべきではないか？」、「本人にとって、丁寧な対応が受けられない普通学級では、楽しくないのではないか？」でした。そして、普通学級を選んだものの登校拒否に陥って、結局、特殊学級に転入し、落ち着きを取り戻した事例などを挙げ、再考を促すのでした。

ただし、これらの話し合いは淡々としたもので、時には雑談、時には笑いが出るようなこともありました。とはいえ、どうすればこちらの意志がぐらつくか、あるいは考え(論理)のほころびをつくかといった、探り探りの質疑応答が繰り返され続けられました。

いずれにせよ、「最終的には、保護者の希望を受け取って、後日、教育委員会(就学相談委員会)において検討し、委員会としての見解を面談にて通知。さらに、そこでのやりとりをして、最終決定を行うということで、最低でもあと2回は通うことになるでしょう」とのことでした。

そして10時30分すぎ、面談終了。

サトシのいる隣室に行くと、ちょうど子育て支援課のMさんに遊んでもらっていて、とつてもご機嫌のようでした。そこで、遊んでいただいた？(もちろん、これが観察・チェックになるわけですが)ことに対して丁寧に礼を申し上げ、退室となりました。

11月17日(水)午前9時半ごろ市教育委員会より電話あり。

先日の就学相談への出席の謝意を伝えたと、「その後、就学指導委員会で検討した結果、お父様が主張された“社会性を身につけること”に対してのお気持ちはよ～わかりましたが、サトシさんの状態を見させていただいての判断としましては、“養護学校”で教育を受けられるほうがよいのでは」となりましたので、その旨お伝えいたします。ご了解いただけますでしょうか？

特殊学級を勧められると思っていた当方としては、「養護学校」の判定に、いささかガッカリしたが、少し話を聞くと、悟士の判定に立ち会ったなかの一人に養護学校長がおり、それが「養護学校が妥当」と結論付けたようである。その後、先方は、「本当に、ご意向に添えない結論で恐縮なのですが、お母様ともよ～くお話しをした上で、またご相談させていただければと思いますので、よろしく願いいたします」と言ってきた。

いずれにせよ、こちらの要望は変わらない旨を伝え、次回、再度の話し合いをすることで電話をきることにした。

2日後、市教育委員会担当者より電話あり。

「あまり先に延ばしてもしょうがないので」ということで、いくつか挙げた候補日から、一番早い11月24日を選ぶことにする。

第2回目：11月24日(水)午後1時～2時

教育委員会担当者と就学委員会副委員長の元教諭(30年ほど前に複式学級で教鞭をとり苦労した経験あり)の2人と面談。

まず始めに、なぜ養護学校の判定をしたかの説明を受ける。

曰く、

「ジャンプはできるので、足は達者だとは思いますが、バランス感覚が計れる片足ケンケンはできませんでした。階段の上り下りに関しては、上るのはよくできるが、下りは手すりを持たないとできなかつた。お絵かきは、丸をよく描くけれど、それ以外のものはあまり書きませんでした。アンパンマンが好きだからですね。なるほど。ただ、こうしてというこちらの指示に対しては、気分が乗ればやるけれど、そうでないとまったく興味を示さない。だいたい、2～3分で別のことを始めるなど、むら気が多いようにも見受けられました。それから、言葉は、アンパンマンはよく聞き取れましたが、それ以外はあまりということ、難語から一語文への移行期ではないかと思われまふ。また、型はめですが、丸や三角など単純なものは、あれこれしているうちにはめこめるのですが、ひし形のようなものになるとダメでした。

で、問題は、悟士君の行動ですね。どうも、周囲の関心をひこうとするためでしょうか？クレヨンや鉛筆を投げつけるといった行動や、イスや机から飛び降りようとしたり、鍵をあけてテラスや廊下に出ようともしました。ダメ、というと、よるこんでもっとしようとする。これは危険です。ケガをしたら大変です。普通学級では、サトシ君だけを注意しているわけにはいきませんので、このような行動が頻発すると、対処できないことになる。クラスとしても、サトシ君にふりまわされることになる。

ということで、ゆっくりと集団行動や学校のルールを学んでもらいながら、勉強のほうもしてもらって養護学校という判定をしたわけです」

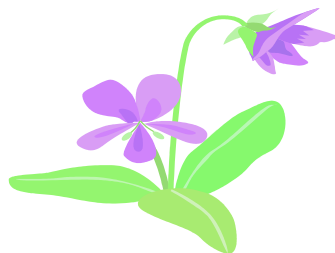
このように、できないこと、問題であることを淡々と説明された。障害児であるのだから、できないことがあるのは当たり前のはず。なぜ、この子の、できるところ、伸びるであろう可能性の芽をみようとししないのだろうか、といささか憤りを覚えたが、その怒りはぐっとのみこむことにする。そして、淡々と以下のような答え方をした。

これに対しては、しかし、学びとる能力があるはずなのだから、すこし時間はかかるかもしれないが、いずれ対応していけるはず。当方も、それなりに訓練させていく、と。

結局、1時間半ほど話し合いをしたが、この日も平行線のままで終わる。

ただし、先日のサトシの様子が非常に多動的であるとの指摘があったので、「普段はとてもおとなしいはず」と反論。現在通っている保育園で、動き回って大変だといったクレームはきたことがない旨を伝えると、ならば、「普段の保育園での様子を見たい」との要望が出され、その視察後に再度話し合う、ということになった。

……………つづく



県教育局との話し合い(2005年3月4日 一次入試不合格の発表後) 於・埼玉県職員会館4階音楽室 司会・野島



竹迫 今日発表があり、斉藤さん、山田さん、二人とも定員内不合格になった。3年目、5年目という長い時間をかけて、今年は校長と話したり、体験入学をしたり、今まで以上に期待していたのに残念だ。なんとか二次につなげたいという思いでみんな集まった。まず初めに、それぞれ結果を見てから校長と話をしてきたので、その報告をしたい。そちらも定員内不合格を出さないよう指導をされてきていると思うので、どうだったのかも聞きたい。

田部井 雪の中お集まりいただいたことにお礼を申し上げる。4回話し合いに参加させていただいたが、内容は厳しいものがあった。基本的姿勢としては、定員内不合格は出さないよう、校長など通じてくりかえし話してきた。皆様方のご意見や強いご批判を受け止め、理解を深めていかなければいけないということもわかったので。管理職の研修、障害のある生徒の学んでいる学校に行ってもらい、それをもとに研修をした。養護学校の先生を招いての研修もしてきた。山田さんは浦和一女の体験の希望があり、2月9日に給食をいただき一年生の教室で4時間体験入学した。本人が体験するだけでなく、高校の先生にもそういう姿を見てほしいと思ったから。斉藤さんもお母さんが事前に大宮商業の校長と会って話す機会をつくった。学校は校長だけでなく職員を入れての学校運営をしている。2人が抱えている障害の内容を広く研修してもらうため、他の学校にも行ってもらった。研修の前と後では職員の考えも変わってきたのかなと、校長を通して把握した。しかし高校には入試がある。その結果が今日の不合格となり、残念ではあるが、二次募集が来週あり(10日入試、16日発表)、お二人がまた再度チャレンジすることについて、浦和一女、大宮商業の先生方は承知している。

斉藤 毎年校長(大宮商業)の話聞くのが親のつとめと思っている。今回の不合格について言われたことは、LD、ADHDの生徒がいる中でうちの息子を抱える不安が現場にあるようだ。「出席日数をこなせば進級というのは義務教育のうちだけなので、入学=進級=卒業と考えられると問題がある。その中で受け入れるにあたっては、聴講生(そういう制度はないが)という形で半年、一年、準備期間のような形で、本人に接しているうちに現場の教員の理解を得られるのではないか。入試で緊張している姿しか教員たちは見ていない。本来の状況を見て接する時間が必要ではないか。聴講生という形になったらお母さんとしてはどうですかと言われた。最初から同じ時間をクリアするのではなく、給食までとか少しずつやっていく方法もあるのではないかと言われた。いろいろな案を話された。これはしかし、試験の前に言うか、合格してから言うか、と言われた。

「一次で不合格なのだから二次を受けても同じですよ」と言ったら、こういう具体的な話をされた。5年間で初めての具体的な話だった。

試験の前に願書を提出に行ったら、朝から教頭が控えていた。「お時間ありますか?」ということで応接室で、「個人的には応援しているので、これからも挑戦してください」と教頭に言われた。校長も教頭も前向きだった。

山田 去年とは違って、今年に入れると思っていた。試験通学に田部井さんが来てくれたし、校長(浦和一女)も理解のある人に見えた。残念な結果ではあったが、みなさんにお世話になった。試験通学のときも、本人は他の生徒に話しかけ、積極的だった。私もああこれならやってゆけるなと思った。

今日、校長に言われた不合格の理由は以下の四つ。本人から、是非入りたいという気持ちをはっきりと伝わってこなかった。面接のときも、入学したからには進級、卒業させたいという先生の気持ちがあるが、それを約束できない。授業でどんなふうに教えたらいいのか、本人がちゃんと座って授業を受けられるのかどうか分からない。トイレや教室移動のときのこと、もしものとき、安全確保ができるかどうか分からない。という、この四点を総合的に判断した結果の不合格だと説明された。

大坂 結果は去年と同じだが、もしかしたら前進しているのかなという印象も受けたが...。受験する側の気持ちが少し理解されてきたのかなとも思った。ただ、合格できない限り、「気持ちはわかるんだけど」というところで終わってしまうと思う。二次募集までにもう少し強力な指導をしてもらいたい。

田部井 理解をしないことにはものごとは進まないと思う。我々のできることは定員内不合格を出さないということと研修の中身

をつくっていくことが大事。なにか強い圧力をかけてどうこうするという問題ではなからうと思う。入学の許可は校長の責任。

佐久間 本人が入りたいという意思が伝わってこないということが言われたが、それは入ってみて初めて分かることだと思う。入学してから留年したり中退する子もいる。娘の場合は本人が行きたがっていた。学校へ行けなくなって家にいると、行きたかったんだなというのがわかる。娘は、入ってみてから本人が入りたかったんだということがすぐわかった。進級と卒業が約束できないというのは障害者だけじゃないと思う。授業で何を教えるかは、どの担任も困ると思うが、娘の担任には先生の持っているものでつき合ってくれればいいとお願いした。そして先生が独自に教材を用意してくれた。二年生になって華道部に入った。学校の教員ではなく、プロのお茶の先生が教えに来た。まさかこんな子が来るとは思わなかったろうが、その先生は初日から娘に直接話しかけてくれた。先生はその後「花をさす手つきが柔らかくなってきましたよ」と言ってくれた。本人と向き合うことが大切である。

猪瀬 親より頭にきている。優しい言葉で思わせぶりのことを言って切り捨てていく。切り捨てることは昔と変わってない。今、ノーマライゼーションと言えなんでもすまされる。研修についてもほかの受け入れ校に行くとか、養護学校の先生を呼ぶとか、それは二人を受け入れる研修にはならない。マイナスの研修だ。実際二人とつき合うことをしなければ研修にはならない。「成果」の中身を教えて欲しい。

田部井 成果は学校の職員が障害者に対する理解を深める、ということ。山田さんも斉藤さんも学校に行ってお話しする中で、そういう理解を肌で感じたというお話があった。

猪瀬 二人を受け入れるための研修だったと思う。受け入れられなかったのだから成果は無かったんじゃないのか。「一般的な障害者」を受け入れてくれという話をしたわけじゃなかったと思う。「一般的な障害者」に比べて、実際の二人を見るととても受け入れられない、ということになってしまうのだったら研修はむしろマイナスである。

田部井 教員が二人を迎える雰囲気、以前と変わった。それはよいこと。二人を受け入れるかどうかは選抜試験を受けていただいて決まること。結果は我々にはどうにも出来ない。我々にできるのは環境をつくること。

猪瀬 連絡会の言ってきた研修は、一般的な障害者を受け入れてくれという研修ではなかったはず。何が成果か。

田部井 そういう意味なら猪瀬さんの言われることを理解した。

武内 教育局が「定員内不合格をさせない責任がある」「試験通学に意味がある」と言うなら、このふたつのことについて校長は二人のお母さんに一言も言っていないじゃないか。「定員内不合格をまた起こしてしまって申し訳ない」と言ってない。それから今回の体験通学について具体的にどうだったかという言葉が何も無い。本人の意思がわからないとか、トイレが出来ないということは言うけれども、その二つのことを、校長先生がどう考えているのか。明日でも明後日でも校長先生に聞きたい。社会的な問題だ。二次募集に向けて強力な指導をお願いしたい。

田部井 校長先生にはこれまでもお会いしてきたが、またお会いする予定です。

今井 定員内不合格というのは、一次は、許されるのか。

田部井 こちらとしては指導した。だが合否は校長の裁量権。

猪瀬 校長が定員内不合格を出すときには、発表前に教育委員会と話をするのだから？

田部井 指導した。よくお話しして、出さないように、選考会議でよく議論をするように、と話す。

今井 能力・適性と言ったときに、個人の能力に問題があるのか、それとも学校や社会に問題があるのかという話し合いをこれまでできてきているのではないのか。トイレができないのは能力なのか。



木村 本来あってはならない定員内不合格を出してしまって申し訳ない、というのが最初にあるはず。謝罪ものだ。校長も、職員の理解をそこまで高められなかったということについての責任がある。ただ前進としては、今まで不合格に理由に関し「総合的に判断」という言葉しかなかったのが、理由が具体的に出了という意味では重要。山田さんに関して挙げられた4つの点は、すべて職員の側の問題。本人の問題なのか？ そうじゃない。ただ、局のほうがそれなりにやる気になって動いたことが、学校の理解につながっている。田部井さんはこの三月で異動。いる間に具体的な動きをやっておいて欲しい。4月になって担当者が代わったら、またゼロからのスタートになってしまう。

武内 校長が話したことは事前協議の中で言ってきたんでしょ。

田部井 事前協議の中では、二人の試験のようすについて話した。今あがってきたことも、ある程度話した。そして難しいということ

も出された。研修の中で、障害者に対する理解を作ってきた。今日の結果を聞くまではわからなかったが、

武内 4つの中には差別的なことも入っている。もう一度私たちと校長を含めて話す場を作ってほしい。

田部井 理解をいかに高めていくかということが、受け入れの条件を高めていく。まだ溝があるかもしれないが、私どもの姿勢としては定員内不合格をなくすということで、課を挙げてやってきた。

猪瀬 強い指導があればひっくり返るだろう。校長が先生達を説得できる何かがなければ、それを教育委員会がやるべき。やらなければ同じ繰り返しになる。

武井 教育局という立場の人が教員を指導するのに、どうしてそんなに時間がかかるのか。それ自体は指導力の問題だ。あってはならない定員内不合格に対しての指導なわけだろう。理解がとても大変だと言うが、そんなに大変なことなのか。

田部井 時間がかかりすぎるのは申し訳ない。飯能高校に二人の障害のある生徒がいる。一人は知的障害と自閉症の生徒。もう一人は知的障害。受け入れに当たって教員の中で難しいという声があった。事前に、受験する生徒の中学のクラス担任と交流を持ち、研修会を持った。最終的には、校長も教頭も職員も受け入れようということになった。入学して11ヶ月たったが、課題がいろいろある。今回の二校の校長が聞きに行ったところ、一番大きな問題は進級ということだった。評定をするのに、他の生徒と大差があるのに進級させたのでは公平感を欠くので、配慮した。だから進級が出来るかどうか。それから、もうひとつの問題は、ときどき所在がわからなくなるので、複数の職員が探し回った。本人がどこかへ行ってしまったときの安全の問題。仮に事故があった場合の責任のとり方。そして、二人がクラスの中でコミュニケーションをどうやってつくっていくかという問題。なかなかつくれていないし、時間がたつごとに周囲も難しいと感じているという話だった。そういう課題を飯能高校は持っているので、大宮商業や浦和一女の校長は、理解を進めるためにはそういう課題をどうクリアするかを考えていけないなど考えている。

今井 それがさっき猪瀬さんの言った研修のマイナスの成果。そういう話を飯能高校で聞いて二校の校長がそれらの課題をクリアしないと受け入れられないとマイナスの判断をしたとしたら、それこそが研修のマイナス面。

武内 田部井さんが今そういう例をここで言うことに問題がある。だからこそ、一緒にやっっていこうとならなければいけないのではないか。

門坂 最初の挨拶からそうだったが、能力、適性、コミュニケーション...みんな個人の責任なのね。「個人」と言っているのはすべて



ハンディキャップで、それをクリアしてから入ってこいと言っているようなもの。コミュニケーションがとれなければ入るのは難しい、と言うのだから。それでどう障害者を理解していかしているのか。交流はするけど日常生活の中では一緒にやれないよと。

田部井 自閉症について知るため、専門家を呼んで研修をする。課題は課題として認識しなければ、問題は先へ進まない。飯能高校の課題は現実としてあるわけだから、見ておかなければならない。私がつとめた高校では車いすの子供を受け入れていたが、設備が無いので階段をかついだりするのが大変だった。

門坂 私の息子が就職できないのも「コミュニケーション」が理由にされる。しかし息子の友達は、なぜ彼がコミュニケーションに問題があるとされるのかわからないと言う。付き合いの長さによってその判断は大きく違うと思う。前に覚書を交わした中で、一番の基本は定員内不合格はあってはならないということ。二番目の定

員内不合格を出したときの理由を明確にというのは定員内不合格を出さないようにするために考えるべき材料。

田部井 飯能高校の例は、課題は課題として認識しなかったら先に進んでいかない。課題はあったんだけど受け入れていると。ただ現実に課題があるんですから、それを認識しないと受け入れることは難しい。

木村 飯能高校の生徒の母親と話をする、県の人ひんぱんに来るようになってから学校の先生の対応が随分違って来た、と言う。現場は、応援がないと思うことが一番不安で厳しい。一緒に考えていくということが大きい。県の人目を見てくれることが大事。

田部井 前任者から、研修は今年度のテーマであって、あなたの大きな任務であると言われた。空き時間を見つけて県内外の定時制高校を歩きまわった。研修は、生徒が学んでいる場に先生に行ってもらえるよう、飯能高校を選んだ。私も引継ぎは大事にしたい。

山下 二次募集までに、校長と話をし、研修の話もからめて、落とされた理由についておさえるべきではないか。研修は交流やきっかけづくりという意味では重要。車いすの押し方などは参考にはなる。が、反面自分の知らない障害をもつ人に会うと構えてしまうということも。私もいろいろな障害をもつ人とつき合ってきたが、つき合っていけば一人一人違う。というより、関係によっても違ってくる。研修が参考になるということは、この障害にはこうすればよいという先入観を持ってしまうというマイナス面もついてくるが、それは状況によって打ち砕かれる。親と一緒にいるとかいないとか、他に誰もいないで自分と一対一になったとか、状況によって全然違って

くる。それはつき合っていかなければわからない。だから、研修をやると、ますます大変な面も見えてくるからプラスとマイナス面をもたざるを得ない。校長が挙げている項目の中で、コミュニケーションというのはお互いの関係の問題。だから、一緒にいないとわからない。研修を深めるということでは到達できない、手探りの中で新しく生み出されるもの。その子と親の間で成り立つコミュニケーションとはまたちがうものを生み出さなければならない。入学させなければ解決しない問題である。授業のやり方などについても、まずは受け入れ校が今までやってきたとおりのことを一緒にやってみる中で「どうしたらいいんだろう」と考えていくことであって、保証しなければならないことではない。安全については、本人が一番探していると思う。うろろろするのも安全を求めているんだと思う。コミュニケーションが成立しない中で、必死に手探りしている状態であると思う。そしてそれを一番わかるのは生徒たちだと思う。一緒にいないと、コミュニケーションそのものが成り立たない。やっていく中で、どうしても対応しなければならないことが出て来たときに、研修をやればいいのかと思う。最初にいろいろやると、見えるものも見えなくなる。時間をかけなきゃ駄目。飯能高校が解決が出ないままに取り組んでいるということが大事。そういう理解を校長にも伝えてほしい。

田部井 山下さんの言う「一緒にいる」という話が、正直言って私にはわからない。実は私の知人の弟が、三十数年間いた精神病院から出てくることになった。どうつき合っていくべきなのか悩んでいる。「一緒にいる」と言うは易しく、中身は難しいと思う。しかし私にとって大切な友人だから、力にはなりたいと思っているのだが。

今井 その話がそのまま(高校の)現場の話なのである。そうなったとき、どうやって現場を支えていけるかということを我々は話し合ってきたのだ。

田部井 今の話は、一人の人間として触れ合う部分があったと思ったから話させていただいた。教育局という立場で話すのとは違う。

山下 私の弟がやはり入退院を繰り返していた。弟は私を一番怖がり、同時に頼りにしていた。しかし親・きょうだいだけではどうしてもやっていけない。たとえば「職安へ行ってこいよ」という話をするのもあったが、弟のためにやることは本人にとって苦痛で、どんどん追い詰められてしまう。ちょっとした変化によって緊張が高まる関係になっていた。しかしそこへ全く関係のない人が来ると、その緊張がふっと解ける。第三者の役割というものはすごい。近い人には絶対にできないことを、クラスメートはできるのだ。それはクラスメートが「なんでこんなとこに障害者が来たんだよ」と思う、いやおうなしに障害者に関わらざるを得ないという立場になるから。障害者を支えようと思うような立場の人ばかりだと、どんどんつらくなる。私の家も、この家は緊張で爆発するんじゃないかと思ったときに、回覧板がまわって来ただけで緊張が解けることがあった。「ここはその人(障害者)のためにあるんじゃないぞ」という場が、すごく大切なのだ。

藤崎(今井通訳) 二人が落ちた理由は介護の問題だったのか。では介護を誰がやるかはっきりすれば、入学できたのか。勉強ができないから勉強しに行くのだろう。義務教育が終わって他にいくところがないから高校へ行くのだろう。

田部井 二人の不合格は、介護の問題が主な理由ではないが理由の一つには入っている。ただ、これまでは落ちた理由がよくわからないままだったが、今年はそのそれぞれの校長が二人によく説明をしてくれた。勉強をするために学校へ行くというのはその通り。しかし高校は小・中学校とはちょっと違う。入るためには試験を受けなければならない。制度は制度として大事にしていきたい。が、一方で、二校の校長も二人の個別の事情も配慮して対応したいと思っている状況もある。詳しくは言えないが、わかってほしい。

竹迫 校長が理由をきちんと言うようにしたということで、これは知事さんと話したということもあるのかなと思う。しかし校長の話聞いて思ったのは、意思表示ができるかどうかとか、進級とかいうのは能力の問題。それを解決して入れるようにするというのではなく、やはり「一緒にやっていく」という姿勢を持たないと定員内不合格は続いていく。先日飯能高校の先生達と話す機会があり、田部井さんの言われたような課題で悩んでいることを聞いた。受け入れたところで課題を考えながら一緒にやっていくことがノーマライゼーションと思う。そういうことを校長に話してほしい。期待だけ持たされて終わるだけでは、研修の成果が無になる。

門坂 義務教育でもうちの息子は「本来いてはいけない子」であり、息子はそこへ無理矢理入っていった。最初は追い出し工作をされたが、中学まで行き、高校まで心配してくれるようになったのは、「もうしょうがない。いるんだから、どうにかしなくちゃ」と先生達が腹をくくった、諦めたときからだった。そこから変わった。そのあとは息子も机に座っているようになった。最初から条件を整えてつきあい始めたわけではない。その点、高校は入試選抜があるので、覚悟の決め所がない。

藤崎(今井通訳) 俺は生活ホームに住んでいたが、今団地で一人暮らしをしている。中野屋さんで実習をしたときは、店の人たちと俺に何ができるかと話し合ったが、結局車いすに座って店の前にいるということしかできなかった。が、店では「藤崎稔さん、職場実習中」という文字を電光掲示板に入れてくれた。だから考え込まない方がいいよ。なんとかなるから。

田部井 有り難うございます。

大坂 いまの「どうにかなる」という話とか、門坂さんの「学校が開き直ったとき」という話とか。私も田部井さんがやったということで、もしかしたら流れを変えられるんじゃないかと思って、さっき言ったのだが、3月までにもうひとふんばりしてほしい。

田部井 研修の成果について問われてつまるところもあったが、去年の五十嵐指導幹が研修を考えてみたい」と述べたことを受けて今年取り組んだ。いまできることを、制度の制限もあるが取り組んでいる。藤崎さんの「何も考えずやってみよう」というのも一つの考えと個人的には思う。ただ教委としては「何も考えず」というのも難しいが。

山田 小・中学入学に入るときに校長と話をしたとき、コミュニケーションができないし、トイレも一人でできず、どうやって先生が授業

をやっていいかわからないと言われた。そして何かあったら学校には責任があるから困る、と言って養護学校をすすめられた。今回高校の校長に言われたことと同じことを言われ続けて、ふつう学校で過ごしてきた。中に入ってやっていく中で、本人も周りも先生も馴染んでいくということが9年間ずっとあった。やはりまず受け入れていくことが大事。それでも学校側が心配だということであれば、教育委員会も一緒に心配していくんだという姿勢を見せて欲しい。入れたら後は学校の責任とはしないで欲しい。親としても先生の不安等を受け止めて一緒に考えていくという気持ちでいる。

竹迫 同じことの繰り返しにならないためにはどうすればいいかということ田部井さんにやって頂かないと。

門坂 どこで誰が腹をくくるか、だ。それが田部井さんの立場であり、そういう人がどうしても必要だ。事前協議で唯一、校長に強い意見ができる人。話を聞いて「それは大変ですね」と言うか、「それでも定員内不合格はだめだ」と言い通すか。

武内 親は腹をくくっている。本人も、今は昔と比べ、体験入学や研修があり、拒否はしないという土俵ができてきてはいる。もうちょっと整理して、改めて話を詰めたい。

(5分休憩。全員で打ち合わせ後、以下の三つの要望に対し、回答をもらう)

二次募集に際し、定員内不合格を絶対出さないようにして欲しい。

不合格の理由として挙げられた課題については、まず入学をして、日常的に学ぶ中で一緒に考えていく課題であると認識して欲しい。そして教育局としても受け入れ校を孤立させず、一緒に考えていくことを表明してもらいたい。もちろん私たちも一緒に考える仲間に入ってやっていく。

それでも不安はあると思うので、二次の前に、今挙げられてきた共に学ぶ上での課題への工夫に関し、これまで様々な体験をした蓄積が私たちの方にあるので、伝える場をその二校で持てるように働きかけて欲しい。懇談会の形で。

田部井

については「やります」

については「当然のことなので、受け入れてくれる学校の相談にはのっていくつもり」

については「二次の前には時間的にできない」

山下 事前協議の機会に、別室でそういう場を設けられないか。

田部井 ノウハウを伝えたい、ということは伝えておくと、教育局として場を設けるとは言えない。

ということで、まとめとして出した三つの要望のうち、最後の項目については受け入れられませんでした。その他については、局としても真摯な努力を傾け、また受け入れ校でも前向きな姿勢で二次入試に臨み、結果として二人が合格したことは、大いに評価できます。

主席は1年で交代するらしいです。新しい主席が今年度の取組みを踏まえ、さらに多くの高校での受け入れを進めるとともに、受け入れ校での教職員の相談にのり、共に学ぶ高校生活を支える環境づくりに努力するよう、引き継ぎを行ってほしいと思います。



みんな一緒に普通学級へ・ どの子ども地域の公立高校へ 埼玉連絡会

ご案内

4月相談会： 4月16日(土) 1:30～4:00 大宮ふれあい福祉センター201 会議室
048-667-1616(大宮警察署近く)
連絡先・吉田(048-648-8573)

5月相談会： 5月15日(日) 1:30～4:00 鴻巣市総合福祉センター2階研修室
048-597-2100(北中の近く)

春日部市教育委員会と話し合いました



本誌前号に載せた「確認事項」および「就学指導の抜本的見直しに関する提案」に基づいて、春日部市教委と2月25日に話し合いを持ちました。こちらの参加者は15名。教委からは就学指導担当の伊藤さんと前任者の鎌田さん等が出席しました。通常学級に学ぶ親が付き添いを強いられている状況に対し、どうやって学校全体で受け止めてゆか、また「本来は別の学校が適切」といった就学指導をどう改めてゆか等について話し合いました。この中で、市教委は、庄和町との合併に際し、就学指導委員会を就学支援委員会に再編成する中で、それらの課題を考えてゆくと答えました。

伊藤（鎌田氏から引き継ぎ2年目。市内の小学校教員だった）2002年の確認事項から基本的に考え方のスタンスは変わっていない。あくまで保護者の意向を尊重している。通常学級の中では設備が整わない現状があるので、保護者に協力を働きかけている。介助者の人件費など、希望を叶えられない面があるが、少なくとも通常学級希望者には気持ちの面で負担なく教室に入っていけるようにと、学校へは学校長を通じて話している。今年度は保護者の希望によって、内牧小に情緒障害特殊学級を新設した。普通校へ通いたいのが、その中で個別指導を受けたいとのことだったので。教育委員会でも、どこに障害児がいるのかを把握して、就学前から相談にのっていくこと、縦の連携が大事と考えている。また、春日部市と庄和町の合併に際して、就学指導委員会から就学支援委員会に改めていくべきと考える。地域交流については、A小で1名、B小で1名と、わずかながら始まっている。保護者の意向があれば、教育委員会が間に入って学校と話せる体制が大切と考えている。

TOKO 保護者の気持ちに負担がかからないようにと校長に伝えたというが、どのような話を校長にしたのか。

伊藤 学校はまず構えてしまうので、学校の児童として入学するのだから学校体制を整えてほしいと話している。一人の先生の負担にならないように、保護者ともよく話し合ってくれと伝えている。

TOKO 一人の先生の負担にならないようにということを、校長が先生たちに話していると思うか。私の娘は「とても大変だ」と担任に言われる。歩けないなら休み時間に歩く練習をさせるとか、知的水準が低いのなら勉強しなくていい、手でページをめくる練習をしていればいいのか、他の先生が担任に言ってくる。ストレスのたまった担任が、あげくに「まりなちゃんさえいなければやらなくてもいいことをやらされている」と、本人と他の生徒の前で発言したりした。

伊藤 細かい話まではこちらには伝わってこないが、そういうことなら現場に行くときに事情を聞いてみる。

TOKO 先生一人でやるのは難しい。私以外の第三者を入れるため、学生にボランティアをお願いしたりしたが、担任からはボランティアよりいつも同じ人に入ってもらうほうが現場はやり易いと言われた。補助員については知らなかった。

伊藤 それは現在は派遣されていない。緊急雇用対策の予算は平成16年度から削られて、今小学校では0人、中学校で1人という状況。

TOKO 一番お金がかからなくてできることがやられていない。保護者の意見を尊重すると言うが、「本来は別の場で教育を受けるのが適切」といった判定を相変わらず行っているんじゃないのか。

伊藤 就学指導委員会という組織があるので、急にやめるわけにいかない。個別に来てもらった人には、何も答えないでは帰せないし。

TOKO 文科省の就学基準に基づいている？

伊藤 基づいている。勝手に出来ないで。

TOKO いや、できるはず。「こういう子はうちでめんどく見なきゃならない子ではないのに、保護者の意思で来ているのだ」という矛盾した位置づけをされていることが、人の心を縛ってしまう。

TOKO 先生の気持ちひとつで変わってくる。どういう人が就学指導の相談にのっているのか。私もそこにいてみたい。しなくていいはずの30分だと思う。少子化で、今は幼稚園が障害児を受け入れている。つまり学校に上がる前に一緒にいる時間が増えているのに、学校へそのまま上がれないのだ。親がつかなくてもいい状況にならないと、職員全体で受け入れてくれないと、井上さんみたいな状況になってくる。今の担任は障害児と一緒に育っていない。

TOKO これまで分けてきた三障害、身体・知的・精神を対策を一緒にして考える方向に切り替えるが、その中で出来る人と出来ない人などに分けるというグランドデザインが10月から施行されていく。いずれにしても分けていくことしか考えられていない。分けていくことは学校だけでは終わらない。

TOKO 下の子は未熟児で生まれたが、保育園に通った三年間ですごく成長した。言葉が通じなくても身振り手振りとかでどうにか

なってきた。同年代の子供と遊ぶのは無理だが、友達との関わりはもっていたい。特殊クラスのある学校は家から遠く、上の子供を転校させたり、子どもたちを近所から引き離すのもいやなので、特殊学級はないがタテノ小に行くことにした。言葉の教室に通っていたので少しは情報が得られたし、地域の人たちがとてもよくしてくれる。

TOKO 「本人、保護者の意見を尊重するスタンスは変わっていない」とあるが、「一緒にいる」ことが基本で、「分ける」ことが例外ではないのか。確認したい。

TOKO 障害福祉課と教育委員会のつながりがない。

TOKO 分けることは差別を生む。ノーマライゼーションは本来アメリカでは施設解体を意味していた。ノーマライゼーションの推進とは、すなわち施設を壊すこと。分けられてきた教育を受けてきた先生だからこそ、井上さんに暴言を吐けるのではないか。そのこと自体は先生にとって正当なんじゃないか。教育委員会などが「差別をしちやいけない」と言うのは正しいのかどうか。

伊藤 南小の件については、教員が発言すべきではないことだと思っている。

TOKO 教育委員会が行ったって何も出来ない。お母さんたちで直談判して学校へ行って、職員会議を開かせたら先生が変わったという例もある。親一人じゃだめ。

TOKO 既に校長にも話して、私の中ではおさまっている。

TOKO 教育委員会が学校や担任を追い詰めている責任はある。「本来そこにいるはずのない、適切な就学先がある」という幻想が進んで「社会的自立」となる。25年間のデータの中で、これは間違いというのがはっきりしてきている。幻想を与えるのが今の判定である。

伊藤 判断の際「行くべきだ」とは話していない。

TOKO 学校教育法の中でも就学「すべき」となっているが。

伊藤 相談なので、そこで「すべき」とは言わない。就学指導委員会という組織で話し合われた中での判断を説明する。

TOKO 判断の根拠は？

伊藤 就学基準。

TOKO それはやはり就学「すべき」基準では？

伊藤 いろんな形の学校があることは紹介しなければならない。今の形だと普通学級では保護者にご負担があることも。

TOKO 養護学校へ行って歩けるようになってから来たらしいという、ふさわしい学校があるという判定がある限りは同じ。ふつう学校の現状では井上さんのように大変なこともある、と。

伊藤 トイレとか介助がつけられない現状は話しておかないと。

TOKO それは判定が積み重なって常識になっている中での現状。この判定をまず変えない限り、いくらお金をかけても同じ。かけるほど「あの子のために」かける余計なお金となってしまう。考え方として、そう思わないか。

TOKO 今小学2年生の息子は普通小に通っている。一年生の時の担任は理解がなかった。「石井君に対してどうしていいかわからない。動作がのろいのを他の子が助けるのは良くない」と言われた。先生には見放されていたが、子どもたちは息子を嫌っていませんでしたので、子供たちに育てられた。二年生の担任は、「助けて」と言えるのが本人の力だと言ってくれる人。周囲の子も助けることを覚える、と。「障害」はそういうことによって、ふつうのことになっていくのではないか。健常児だけの集まりでは、それもプラスにはならない。自分でなんでも自分のことができてしまえば、コミュニケーションがなくても生きていける。コミュニケーションをとれなくなっていく。体の不自由な子どもがいることによって、彼らにとってもプラスになっていくのではないか。子供たちのつながりが無いのは、分けたからではないか。「ゆとりの教育」の失敗によって学習時間が再び増えるということになれば、ついていけなくなる子供が出る。だからできる子とできない子に分けることになるだろうと先生が言っていた。

TOKO 自分が子どもの頃は障害児がクラスにいたが、障害児とは思ってなかった。伊藤さんは現場に入ることはないのか。現場を見てほしい。

TOKO 自分はアスペルガー症候群。先生からの誤解もあって辛かったが、今では障害をもって生まれてきて良かったと思っている。

TOKO こういう場に来るのもいいだろうと言われて来た。

TOKO さっき言っていた先生の発言について。私も定時制高校一年生るとき、先生からひどいことを言われた。その先生は養護学校の先生もやった人だが「養護学校の生徒はバカだ」と皆の前で言った。そのときクラス全員でその先生の授業をボイコットしようと言ってくれたクラスメートがいて、一緒に授業に出なかった。

TOKO 自分の生まれたところで皆と一緒に学ぶということをモットーに…。

誰でも参加できるイベント情報

4月

TELは連絡先

- 4月 4日(月) 教育の欠格条項をなくす会準備会
午後6時半 ウィズユーさいたま
048-479-3799 (ふらっと)
- 8日(金) 社団・拡大事務局会議
午後1時半 場所未定
048-738-3535 (社・埼玉障害者自立生活協会)
- 10日(日) 「どうする社団？」東部地区巡業
午後1時半 暮らしセンター・べしみ？
048-738-3535 (社・埼玉障害者自立生活協会)
- 11日(月) どの子ども地域の公立高校へ埼玉連絡会事務局会議
午後8時 ぺんぎん広場
048-737-1489 (埼玉障害者市民ネットワーク)
- 16日(土) どの子ども地域の公立高校へ・大宮集会
午後1時半 大宮ふれあい福祉センター2階
048-648-8573 (吉田)
- 18日(月) 越谷市障害者就労支援センター・窓口業務スタート
- 20日(水) 障害者の職場参加を語る会
午前10時 職場参加活動センター
048-964-1819 (職場参加活動センター)
- 21日(木) ゆめ風コンサートIN越谷
午後1時半 さいたまコープ越谷センター
- 24日(日) ケアシステムわら細工定期総会
午前10時 ゆっく武里
048-738-4593 (ケアシステムわら細工)
- 30日(土) SDN シンポ「埼玉県の「特別支援教育」は何を目指しているのか？」
午後1時 県立小児医療センター2階
主催・埼玉ダウン症親の会ネットワーク
埼玉県立小児医療センターDK外来第19期家族の会「くれよん・たうん」
048-769-7655 (田代)

くわしくは 黄色い部屋 018-737-1489 Fax048-736-7192 までお問合せください。